きもの文化の伝承を目的とした浴衣の着付け授業の実践と解析
―解析から考える指導法の提案―

発表者　大西　一恵
指導教員　薩本　弥生

１．序論

衣生活においては、旧来の家庭で衣服を作る時代から、既製服を選んで購入する時代となった。日常着が洋装化し、既製服が普及した今日、きもの文化に触れる機会もめっきりと減り、これらの技術や文化が一般に理解されなくなりつつある。一方で、2006 年に改正された教育基本法に「伝統や文化を尊重し、我が国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定されたことを受けて、新指導要領が 2008 年に告示され、中学校の技術・家庭科の衣生活分野では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれたため、和服の着装の体験を含めた授業プランを模索することは必要不可欠である。

そこで本研究では、ゆかたの着装を含む体験的学習を通し、きもの文化を次世代に継承する家庭科の教育プログラムを開発し、その学習効果の検証することを目標とし、特に浴衣の着装実習において技能の理解・習得に力点を置いた授業実践を試行的に行い、技能の理解・習得を目標に着装体験することがきもの文化への興味・関心を喚起するかを明らかにすることを目的とする。

２．授業実践とアンケート調査の概要

小単元	時間	主な学習活動	備考
日本の衣文化を知ろう	１時間	きもの文化と浴衣、及び着付けについて学ぶ。	教室
浴衣の着付けをしてみよう	１時間	実際に浴衣の着付けを行う。	体育館
着付けの振り返りとまとめ	１時間	浴衣の着付けの振り返りをし、単元のまとめをする。	教室

１）授業実践校：横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校
２）調査校および調査対象者：授業実践校中学 2 年生 4 クラス
３）調査期間および対象者人数：2011 年 6 月～9 月・中学 2 年生 175 人
４）回収数および有効回答：回収数：165 部（94.2%）、有効回答：159 部（90.9%）
５）配布方法：配布法（学校へ訪問、その場で実施・回収）
６）調査項目：実習直後および事後の着装感や技能習得意識に関する項目（5 件法）

３．結果および考察

３－１　因子相関分析

実習事後アンケートである振り返り調査の技能・関心、着装時の気持ちと振る舞いの変化 23 項目の関連性を考察するため、全 23 項目を対象に因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。第 1 因子「興味関心因子」、第 2 因子「理解習得因子」、第 3 因子「流行肯定因子」、第 4 因子「伝統変化肯定因子」、第 5 因子「高揚感因子」と名付けた。さらに因子得点を用い相関分析を行ったところ、「興味関心因子」と「伝統変化肯定因子」・「理解習得因子」以外の因子同士には全て有意に相関があることが明らかになった。

３－２　共分構造分析結果

因子分析により抽出された因子 5 項目間に相互に相関があったことから、本研究の目的とする「きもの文化」への興味関心を高めるための授業実践方法として以下の仮説が成り立つかを共分散構造解析で検討した。

仮説：「着付けの技能」の理解・習得度が高いほど、「きもの文化」への興味関心が高い。

解析の結果、「理解習得因子」から「興味関心因子」へのパス係数が有意であった。このことから仮説が成り立つことが証明された。

３－２－１男女での共分散構造の相違

男女別の他母集団共分散構造分析(パス解析)結果を図１と図２に示す。適合度指標はいずれも許容範囲であった。有意となったパス係数について以下に解説する。男子は、「伝統変化肯定因子」から「流行肯定因子」への係数が 0.47 となった。女子はこの係数が 0.24 であり、男女間での差異が見られた。伝統が変化することへの肯定意識と流行に対する肯定意識は項目が似た内容であるため、相関が高くなると予想されたが、女子では相関が低かった。これは、女子の方が「伝統やしきたりは大切である」と考える割合が男子に比べて多

く、伝統変化への肯定意識があまり高くはないからだと思われる。結果、流行肯定への意識へも結びつきにくいと考察される。「伝統変化肯定因子」から「興味関心因子」への係数に注目すると、男子では-0.23、女子では-0.55 となった。女子は伝統文化をステータスと考える一方で、流行にも興味があり、それらを別次元にとらえていることが明らかにされた。

女子は、「高揚感因子」から「興味関心因子」への係数が 0.53 で男子は 0.67 となった。アンケートの結果から女子のほうがファッションに対する意識が高く、ゆかたへの興味関心も高かったが、男子は女子よりもゆかたを着たときの高揚感から興味関心を抱く因果関係は強いといえる。また、「理解習得因子」から「興味関心因子」への係数が女子は 0.48 で有意（男子は 0.18 で有意でない）となり、女子は男子の着付けに比べ難易度が高いにもかかわらず、着装技能を理解習得した意識の喚起が自信へと結びつき、きもの文化への興味関心が強まったと思われる。男子では技能の理解習得ときものへの興味関心に有意な関係性が見出されず、授業の工夫の余地があることが明らかとなった。

３－２－２　帯結び部分練習の有無による共分散構造の相違

難易度の高い帯結びの部分練習を１時間分多く授業実践したクラスと帯結びの練習を行っていないクラスでの結果の違いを考察した。

それぞれのグループでのパス図は適合度がよく、因子間のパスの係数も有意となるパスが顕著に見られた。因子の係数を見ると、帯結び練習なしクラスでは、「流行肯定因子」から「高揚感因子」への係数が 0.70 となり、「高揚感因子」から「興味関心因子」への係数が 0.76 となった。「理解習得因子」から「興味関心因子」への係数が、帯結び練習ありクラスでは 0.62、帯結び練習なしクラスでは 0.24 となったことから、帯結び練習をすることで、より理解習得が興味関心へとつながるといえる結果となった。このことから、帯結び部分練習で技能習得を強化することが興味関心の喚起に有効であることが明確となった。

４．まとめ

ゆかたの着装を含む体験的学習を通し、きもの文化を次世代に継承する家庭科の教育プログラムの開発とその学習効果の検証を目標に特に浴衣の着装実習において技能の理解・習得に力点を置いた授業実践を試行的に行い、技能の理解・習得を目標に着装体験することがきもの文化への興味・関心を喚起するかを明らかにすることを目的とした。

これらの授業実践研究から得られた結果を以下にまとめる。

（１）因子分析によって抽出された全５因子を相関分析した結果、「興味関心因子」と「理解習得因子」に高い相関があることがわかった。

（２）共分散構造分析の結果、「理解習得因子」から「興味関心因子」へのパス係数が有意であった。このことから技能の理解・習得を目標に着装体験することがきもの文化への興味・関心を喚起するという仮説が成り立つことが証明された。さらに男女による差異、帯結び部分練習の有無による差異を検討した結果、有意に差が見られた。以上の結果から、男女でのゆかたの色柄の違いや着付けの難易度の違いがある中で男女ともに、きもの文化に対する興味関心や理解習得を肯定的にとらえてもらうために授業のさらなる工夫の必要性が明らかになった。着付け技能の理解・習得をめざした授業作りのために部分練習をすると理解習得意識が高まり、それが興味関心喚起に結びつくことがわかった。時間数の確保が課題である。

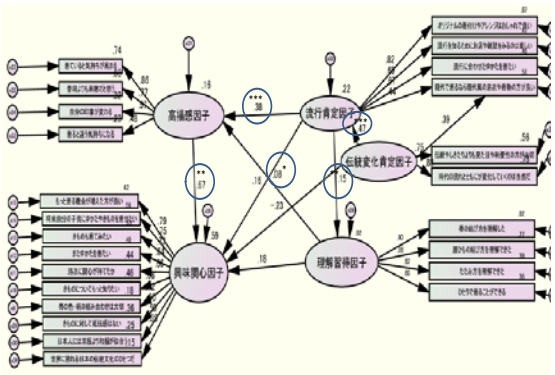

図１　男子共分散構造分析結果パス図

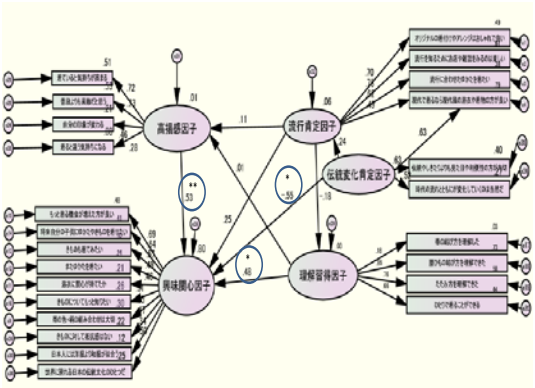

図２　女子共分散構造分析結果パス図